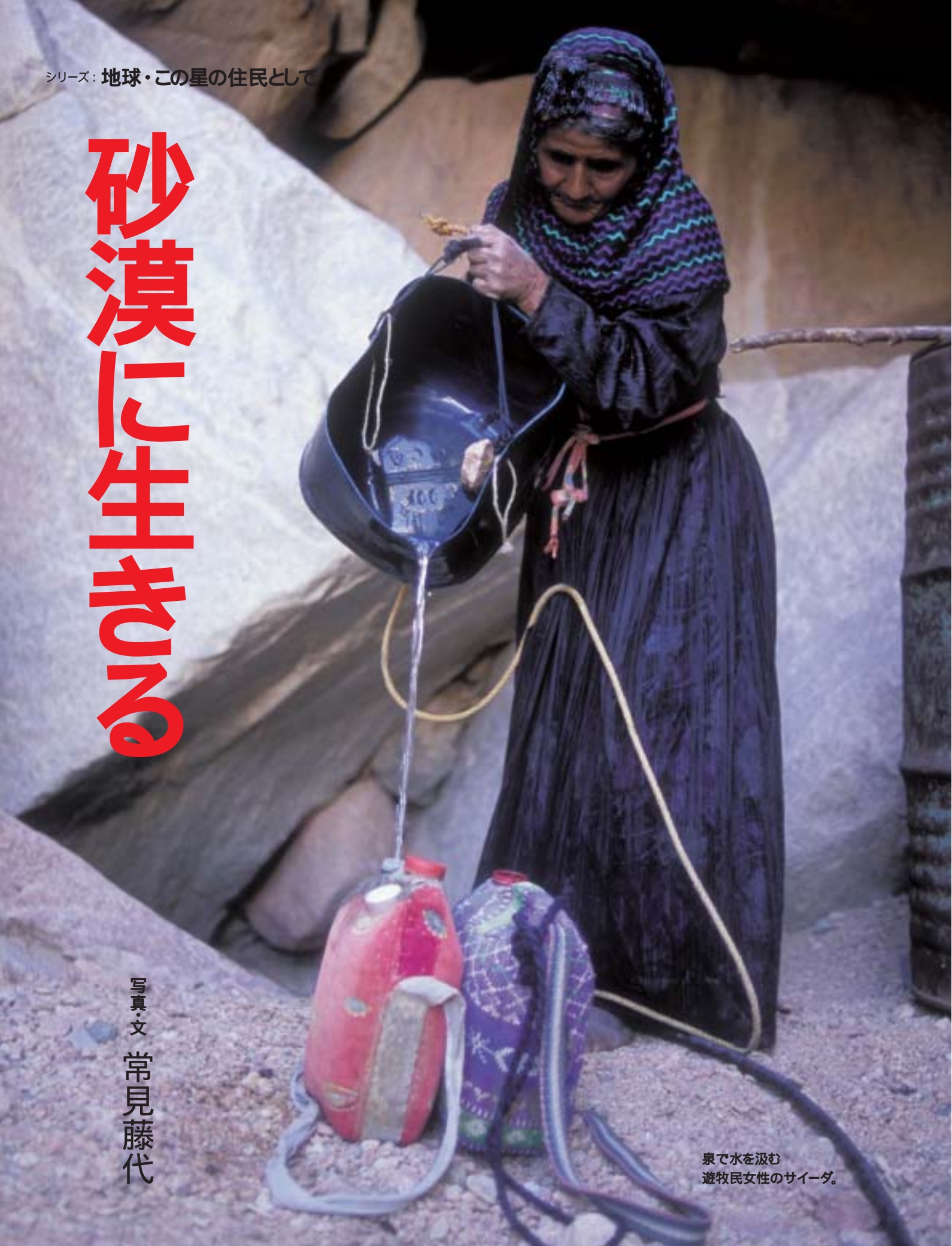


シリーズ：地球・この星の住民として

砂漠に生きる

写真・文
常見藤代

泉で水を汲む
遊牧民女性のサイダ。





(上) サイダの家財道具一式。

(右上) ラジオを頭にかける。ラジオは刺繍を施した袋で包んでいる。

(右下) 冬は、日が暮れると急速に寒くなる。



(上) 朝起きると真っ先に火をおこす。長くて心穏やかな一日が始まる。

(下) ラクダは生活の全てを与えてくれる。一番大事な財産でもあり、かけがえのない友達でもある。

エジプトの東方砂漠に、遊牧民のホシユマン族が暮らしている。1997年以来この地方には雨が降らず、家畜の食料となる草が育たないため、ほとんどの人は砂漠の中の定住地で観光客相手の仕事をし暮らすようになった。今でも昔ながらの遊牧生活を送っているのは数家族にすぎない。

その中のひとり、サイダ(58歳)は、ラクダ7頭とともに一人で砂漠で暮らしている。彼女の一日は、夜空に星がまたたく頃に始まる。枯木を炉にくべて火をおこし、パンを焼く。食べ終わると、ラクダの放牧に出発。夜は月明かりの下でパンを焼き、寝るのは満天の星の下だ。電気も水もガスもなく、燃料は枯木やラクダの糞を用い、水は泉から汲んでくる。自然に抱かれ、自然の恵みをいただきながら暮らす。そんな彼女の暮らしは、おそらく数百年前数千年前とほとんど変わらないものだろう。

一方で、定住地に暮らす遊牧民の男性のほとんどは、今は携帯電話を持っていて、軽トラックを所有して、砂漠の定住地と町を頻繁に行き来する人も多い。また多くの子どもたちがツリストをラクダに乗せる仕事をしている。2006年の春に私が訪れた時には、定住地に衛星放送のパラボラアンテナが登場し、砂漠のど真ん中で遠いヨーロッパやアメリカのテレビ番組が見られるようになった。

ある遊牧民の男性はいつ、「中年以上の遊牧民は砂漠での生活を知っている。でも定住地で育った子どもたちは、観光客相手に簡単にお金を稼ぐ方法を知ってしまったから、砂漠で暮らしたいとは思わないだろう」と。砂漠での生活は苦しかったと、他の遊牧民はいつ。

「昔は砂漠で生えている薬草やファム(石灰)などを集めて町で売るくらいしか仕事が無かった。それもたいしてお金にならず、男性は皆ガラベヤ(民族衣装)を着しか持っていなかった。一カ月くらいひとりで砂漠の奥深くへ出かけていき、ラクダ四頭に積ませた袋を薬草でいっぱいにするまで家に帰れなかった。その間は妻とも子どもとも離ればなれ。まったく人に会わないこともあった」

その一方で、「こう言つ人もいる。昔はお金を得るのは今より苦しかったけれど、生活はもっとシンプルだった。今は少しは楽にお金が得られるけれど、暮らしが複雑で頭がたびれる。体は疲れないけど、心が疲れる」

砂漠で暮らすサイダのところには、もちろん電話もテレビもない。代わりにラジオがあり、世界中で起っている事件は彼女の耳に入る。2004年12月に起きたインドネシア・スマトラ沖地震のことも知っており、「日本はインドネシアにかなり援助してるぞっだね」と言われ、驚いたことがある。もっとも、ラジオを聴くのは多くても一日に2時間以内。それ以上余分な情報は必要ない。

「テレビでやっているのは、戦争のニュースや泥棒のドラマばかり。そんなものをタラタラ見て、自分の大切な時間をつぶされたくない」
過度に情報を詰め込みすぎることは、自分の心を乱すもの以外の何物でもないと思っっているようだ。

遊牧民の生活には時計もカレンダーもほとんど必要ない。朝は明るくなったら起き、暗くなったら寝ればよい。放牧先では暑い時間帯は日陰で休み、日が暮れたら帰る。スケジュールに追い立てられることもなく、時間はゆつたりと過ぎていく。



マグレブ(夕暮れ時)の祈り。
祈りの時はいつも死について考える。



(上) 定住地に暮らす若い少女たち。

(下) 定住地に住むサイードの男家族。夫(右から2人目)は足が不自由になったため、遊牧生活を捨て、定住地に住んでいる。



(上) 結婚式を迎える定住地の若い女性。

(下) 結婚式に特別な料理を食べる女性たち。





息子が仕事の休暇を利用して訪ねて来た。
サイーダの後姿も心なしかうれしそうに見える。